慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	労働喜悦論
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1935
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.29, No.5 (1935. 5) ,p.611(1)- 637(27)
JaLC DOI	10.14991/001.19350501-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19350501-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田評論

五月號

〔口繪〕 □ウィグモア博士 □三田山上の櫻
□落成せる日吉鋪裝道路

□日吉建設計畫擴張資金募集趣意書
□同寄附申込者氏名 □同拂込者氏名

ウィグモア博士再度の來朝……峯岸治三
議會政治沒落の問題……加田哲二

〔書評〕
「明治立憲思想史に於ける英國議會制度の影響」……尾佐竹猛
永田教授の「財政學概說」……井藤半彌
教化を弘めた人……エドワード・シャンクス
「福澤諭吉」を讀む……柴田一能

野球部の近況……恒松安夫
土肥を語る……雨宮白

□塾報 □雜報 □體育會消息 □各地三田會だより □動靜
□北里博士記念醫學圖書館建設趣意書
□故根來君遺兒教育資金募集趣意書
□故伊藤教授遺兒教育資金應募者氏名
□維持會報告 □廣告目次 □編輯餘瀝

□昭和十年大學及高等部入學試驗問題 □表紙……椿貞雄
□カット……兒玉武雄

定價 金參拾四錢
一年分 金參圓四拾四錢 振替貯金東京一八二〇四番

發行所 東京・芝・三田 慶應義塾

三田學會雜誌 第二十九卷 第五號

勞働喜悅論

藤林敬三

內容

一、序言
二、勞働苦痛論の主張
三、小泉、河上兩博士の勞働苦痛論の批判
四、能率心理學上の勞働喜悅論の批評と勞働者心理學の研究
五、觀念論的勞働喜悅論の批判
六、結論

勞働喜悅論

一

資本主義的生産方法の下に於ける人間の勞働が苦痛であるといふことは、勞働に關する社會科學的見解に於いて一般に認められて來てゐる所である。そしてかくの如き認識は特に社會科學的實踐論に於いて既に早くから重要視せられ、勞働の苦痛を除去し、或は輕減すること、また積極的に勞働の喜悅を增進することが種々に期待せられてゐたことは、人の周く知る所である（註一）。更らに勞働、從つてまた勞働者に關する一切の實踐的問題、即ち勞働者政策の總ての問題は、假令それが直接勞働の苦痛を輕減し、勞働の喜悅を增進することを目的としない場合であつても、勞働者の生活の主觀的方面から見れば、それは常に勞働の苦痛と喜悅の問題と多少の程度に於いて關聯するものであることは見逃せない。從つて勞働者政策に屬する總ての問題は勞働の苦痛の輕減、勞働喜悅の增進といふ應用心理學の問題として取り擧げられ得るものであり、またそれは時にかくの如き問題として確かに吟味されなければならない。しかし所謂勞働苦痛論、反對にまた勞働喜悅論は從來學者の注意した著明な問題の一つではあるけれども、不幸にして未だ充分科學的に、即ち心理學的に基礎づけられてゐるといふことは出來ない。これが筆者をして謂はゞこの舊い問題を此處に取り擧げしめるに至つた所以である。

註一　小泉信三著　社會問題研究（改訂版）三九九頁以後　參考。

二

今日の人間の勞働が苦痛であるといふことは果して如何にして認定せられるか。勞働苦痛論の一般的見解は凡そ次ぎの如くである。

人間の勞働は身體的、精神的活動であつて、元來身體的、精神的活動それ自體は常に必ずしも意識的に苦痛を伴ふものではない。極端な例を以つてすれば、人間は何等の活動を行ふことなく、無爲に終始することこそ却つて堪へ得ざる苦痛を伴ふものである。このことは既に人間の快樂、生活上の歡喜が一定の活動を前提とするものであることを意味してゐる。かくて人間の活動は總て苦痛を伴ふものであるのではなく、一定の條件の下に於いてそれが、苦痛なる努力であると考へられる。即ち例へば勞働が苦痛であると見られるのに對して、遊戲、藝術家の創作、學者の科學的研究活動等は苦痛であると云ふよりは寧ろ歡喜に滿ちてゐるものであると、一般には考へられてゐる。然らばそれは何故であるか。これ等の人間の活動は先づ遊戲に於いて知られるが如く、活動の目的は活動それ自體にあり、更らに藝術的創作、科學的研究の如きは時にはそれをせずには居られないといふ內面的要求の結果であると考へられ、從つてそれは遊戲的活動であるとも見られるのであるけれども、また反面に於いては――そしてこの點が寧ろ重要視されていゝのであるが――その活動の目的は活動の結果に存し、この活動の結果は各々自分自身の業蹟として各人の生活感情を條件づけるものである。これ等の人間活動に對して、今日の勞働は先づ勞働者に取つては勞働それ自體が活動の目的であるのではないといふ點に於いて遊戲から區別せられるのが普通である。換言すれば、勞働者は勞働それ自體を目的として雇主に雇傭せられるのではなく、彼等が一定の職業的活動に從事するのは一定額の賃銀をそれに依つて得んがためである。即ち勞働の目的は勞働それ自體の外に存するのであつて、人は

今日賃銀を得んがための手段として勞働に從事する。從つて遊戯は在内的目的を持つ行爲であり、勞働は在外的目的のための努力であると解せられる。(註二) かくて例へば、同じく登山、舞踏の如き行爲にしても、それが一方では一定の報酬を得んがための活動として行はれる場合には苦痛を伴ふ勞働であると見做され、他方では然らずしてそれが在内的目的を以つて行はれる場合には、人の慰樂のための活動であり、遊戯であると考へられるのが普通である。更らに近代的工場勞働者は原則として生産手段の所有から離れて居り、從つて各勞働者の生産物は彼等自身の所有に屬するものではない。また彼等は雇主である生産手段の所有者の指令の下に勞働に從事する。且つ彼等の行ふ勞働は近代的工場に於いては技術的分業の發達の結果、細分せられた僅かに一部の部分的作業に過ぎず、彼等は絶へずこの簡單な部分作業を繰り返し反覆することを餘儀なからしめられてゐる。かくの如き勞働事情は勞働者から先づ他人命令的勞働として勞働に對する彼等の創意を奪ひ取つて了ふ許りではなく、反覆的部分作業は勞働者をして生産物の全生産過程の見透しを不必要のものとし、また事實その見透しを得ることすら彼等には全く不可能のものとなる。かくて勞働の結果である生産物それ自體が勞働の目的であり得ないことは勿論であつて、從つて近代的工場勞働はこの點では明かに藝術的創作活動、科學的研究の努力から區別せられる。

凡そ右の如く在外的目的に對する手段として行はれ、他人命令的であつて、反覆的部分作業に過ぎない今日の勞働が既に勞働者に取つて無味乾燥のものであることは明かであるが、更らに社會的には勞働者は彼等の生活の窮乏に驅りたてられてかくの如き勞働に從事せざるを得なくなつてゐる許りではなく、また彼等は工場の内部に於いては雇主を尖端とする經營組織の末端に從屬せしめられてゐる。既にかくの如き狀態が勞働の苦痛を條件づけてゐると考へられてゐるのである。が更らに既に右の如く無味乾燥であり、社會的な壓迫と從屬の下に行はれる勞働の條件、特に勞働時間の長短と勞働賃銀の大小とはまた各々その程度に比例して勞働の苦痛を增大し、また輕減するものであると見做される。かくて近代的工場勞働は技術的進歩と合理化の發展のために益々非人格化せられ、機械化せられ、物化せられて行く。そしてこの技術的な方面と共に、資本主義の下に於ける勞働者は社會的には正に賃銀奴隷としての存在を深められて行く。W. Sombart は嘗つて勞働者の生活を描いて凡そ次ぎの如く述べてゐる。即ち、近代的工場、資本主義の下に於ける勞働生活は勞働者をして彼等の職業に關する自負心、名譽心を失はしめ、職業活動に對する總ての感情を變化せしめて了つて居り、またこのことは他方に於いては失業の危險と共に、彼等をして從前見ることの出來た共同生活體の精神的な連鎖を犧牲に供せしめてゐる。勞働者の社會生活のこれ等の事實から、彼等の生活、彼等の一日、一年、更らに一生涯の生活は誠に荒寞として味氣なきものであり、Ohne Rhythmus, ohne Schwung, ohne Inhalt. Einförmig. Eintönig. Grau. である。(註三)

以上が大體勞働苦痛論の見解の概要であると見做していゝ。

註二、河上肇著　社會組織と社會革命　二八三頁以後　參考。

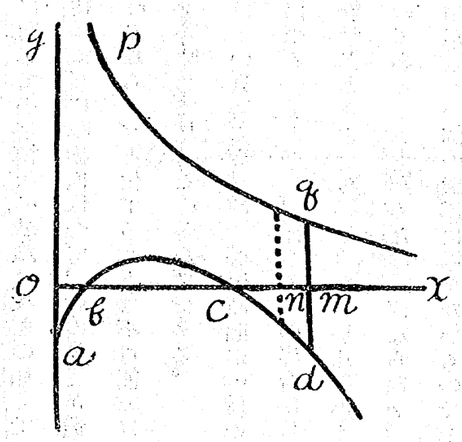
註三、W. Sombart; Das Proletariat, 1906, S. 68.

既に勞働が苦痛を伴ふものであるとすれば、この勞働の苦痛を除去し、若しくは輕減し、勞働の喜悦を增進することが、勞働、從つてまた勞働者の生活に關する實踐的な問題として取り擧げられるに至ることは當然である。かくて從來勞働喜悦論は種々の方面から問題とせられて來てゐるのであつて、筆者は今假りに便宜上これを社會科學上の見解と心理學上の見解に分つて吟味して見やうと思ふ――また別に勞働生理學上の見解を此處に區別して置くことが適當のやうに思はれるかも知れないが、それは左程重要ではない。そしてこの種の見解に就いては何れ後に觸れることゝしやう――しかし勿論、この區別は全く便宜上のものに過ぎないのであつて、問題の性質上それは科學的には當然心理學的に批判せられ、基礎づけられなければならないものであることは明かである。

最初に社會科學者の見解を一二摘出して吟味して見やう。吾國に於いても既に福田、小泉、河上、高垣の諸博士に依つて、勞働苦痛論、從つてまた勞働喜悦論が問題とせられたことのあるのは、讀者の周く知られる所であらう。(註四)

先づ小泉博士の見解に從へば、勞働の苦痛であるのは「勞働時間の過長、分業及び賃銀制度」の結果であり、更らに勞働者が彼等の生計上の必要の切迫から、彼等の欲しない勞働に尙ほ從事しなければならぬといふ拘束、被拘束の意識を持つことに依つて、勞働の苦痛は一層甚だしくなると。その理論的な說明は暫らく別として、吾々も亦此處に指摘せられた勞働と勞働者の生活の諸方面が、勞働の苦痛と重大な關係にあることを認めなければならないであらう。然らば如何にして勞働の苦痛は除去され、若しくは輕減せられ得るか。これに關して博士の勞働時間に關する所見を一例として取り擧げて見やう。小泉博士は、勞働とは「苦痛ある力作」である、といふ W. Jevons の見解を引用して、次の如き見解を披瀝して居られる。讀者のために、博士に依るジェヴンスの引用をも此處に再錄すれば、次ぎの如くである。

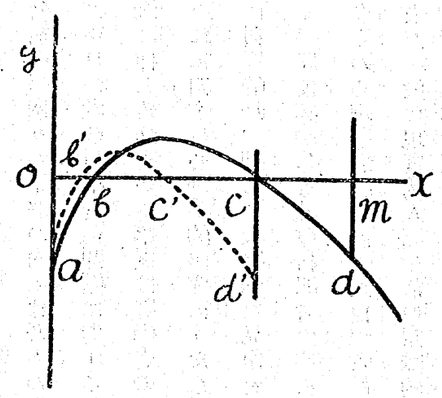
「ジェヴンスは勞働繼續の長短と勞働の快不快との關係を圖を以て示してゐる。彼の觀察に從へば通則として人は或仕事に着手すると、暫くは其仕事に慣れない爲め凝滯の不快感を受ける。ところが力作を續けてゐると凝滯の感は漸次減少して遂に全く消滅する。更に進むと仕事その者が積極的に樂しくなる。その力作の快感は漸く高まつて、遂に或點に達すると、今度は漸次下向し始めて、遂に全く快不快を感じない點に達する。そこで更に力作を續けて行くと、漸く苦痛を感じ始め、其の苦痛は勞働の繼續と共に愈々加はる許りとなる。一方に勞働の繼續と共に勞働生產物の量は增加する。然るに個々の生產物から受ける快感(効用)は生產物の增加するに從つて漸く減少する。そこで何時か勞働の苦痛と勞働生產物から受ける快感との相平均する點に到着する。人間がジェヴンス等の推定する如く常に苦痛の餘剩を避けて快樂の餘剩を求めるものとすれば、人はこの點で勞働を止む可き筈である。」



右の圖に於いて、「ox線は勞働繼續時間を示し、oy線は快不快の度（ox線より上は快樂、下は苦痛）を示すとすれば、勞働繼續の長短に由る勞働の快不快の交代增減はabcd曲線に依て現はされ、生産物より受ける快感の遞減はpq線に依て示される。mは生産物より受くる快感と、勞働不快感との相平均する點である。」

これに對して小泉博士の結論は次ぎの如くである。即ち、「ジェヴンスの觀察は大體に於いて人の首肯する處である。從つて假に經驗に依つて、ocの長さが發見されたならば、理論上勞働を大體に於いて遊戯（愉快なる力作を遊戯と呼ぶならば）と化することは不可能ではないのである」と。（註五）吾々は以上のジェヴンス＝小泉博士の理論的見解を吟味して見ることが必要である。

小泉博士の見解に從へば、勞働時間がoc線の長さに一致するやうに短縮せられるとすれば、cdmの苦痛を免れることが出來るのであつて、從つてこの場合にはそれだけ勞働の苦痛は除去せられ、全體として勞働は愉快なものとなる可能性があるとせられる。しかし凡そかくの如き見解が是認せられるためには、吾々は人間の意識生活が機械的なものであることを認めなければならない。しかし乍ら少くとも多少の心理學的常識を有するものには、かくの如き所論が全く一個の虚構に過ぎないものであることは直ちに明瞭であるであらう。即ちocの長さの勞働時間の勞働は、博士の前提せられるが如く、決してomの長さの勞働時間の勞働の一部分として現はれるものではない。否なむしろ前者は後者と同樣に一つの全體として現はれると考へることが心理學的にはより正しいのであつて、從つて今假りにジェヴンスの見解を正しいものとすれば――それがまた是認し得ないものであることは後に述べることゝす



る――abc線はa'b'c'd'線と同樣の形態を採り、上圖に示したやうに、ab'c'd'線の如き形態を採ると考へることの方が遙かに合理的である。果して然りとすれば、勞働時間をoc線の長さに短縮することは理論上決して苦痛を除去することではなく、c'd'mの苦痛に代つてc'd'cの苦痛の存在を認めなければならないのであつて、從つて博士のやうな好都合な理論上の結論は此處では全く妥當しなくなる。

それは兎も角として、元來ジェヴンスの見解それ自體が心理學的に批判されなければならないものである。凡そ人間の意識現象、更らに此處で吾々が問題とする勞働に伴ふ苦痛或は喜悦の方面はまた現實的には生活環境の種々なる條件に依つて規定せられて居り、且つ統一的自我、或は個性の主觀的勞働態度の感情的方面であると解せられなければならない。しかもジェヴンスにあつては、かくの如き心理學的考慮は全然存せず、彼は他の一切の生活の環境諸條件を捨象して、單に勞働繼續時間の長短を考慮して勞働態度の感情的方面を推定してゐるに過ぎない。彼の見解は高々常識的にそうらしく思はれるといふ推定以上のものではなく、未だ心理學的に基礎づけられたものではない。しかも不幸にして吾々は科學的にはかくの如き推定を假定として認めること

とさへ全く不可能である。筆者は最近別の機會に彼の見解を評して、それは「單なる論理的遊戯以上のものではあり得ない」と述べて置いたのであるが（註六）、この同じ批評は先きの小泉博士の所見に對しても亦同樣に繰り返すことが出來るであらう。

しかし小泉博士の勞働苦痛論が、單に勞働時間の長短のみが勞働の苦痛を條件づけるものであるといふが如き簡單な所論でないことは、既に筆者の先きに指摘して置いた所に依つて明かである。しかも尙ほその所論の全體は博士自身の、また過去の諸社會科學者の單に個人的經驗的、常識的見解に支へられてゐるに過ぎないものであつて、——勿論その個々の見解の內には吾々の尙ほ傾聽に價するものゝ存することは事實であるが——吾々に取つては、何故に今日の社會科學者が問題に對する眞に科學的な見解を求めやうと努めないのか、甚だしく不可解である。即ち勞働に伴ふ苦痛といふ事實は勞働者の生活の意識的方面の現象である。從つてこの事實を理解し得んがためには、當然それに對する心理學的研究に俟たなければならない。この自明の理にも拘らず、從來多くの社會科學者は問題の眞に科學的な、即ち心理學的な見解を適當に援用することを全く忘れてゐるかのやうである。勿論かくは解するものゝ、罪は必ずしも社會科學者の側にのみ存するのではなく、從來の心理學の未發達——その理由の一部分は確かに多くの心理學者の無能と無自覺とに歸因するのではあるが——にも因ることである。換言すれば、今日の心理學が未だ一般に現實的人間生活の意識的方面を對象とする生活心理學の建設を完成してゐないからでもある。

更らに社會科學者の見解の今一つの例として、河上博士の勞働苦痛論を問題としてみやう。（註七）

その主張に從へば、勞働の苦痛は二つの方面を含んで居り、一方ではそれは肉體的、生理的苦痛を意味し、他方では精神的苦痛を意味する。そして專ら前者に關して觀れば、「人間の活動そのものに本來快不快の別があるので、即ちある種々の活動は、それ自身を目的としやうが、他の目的を達する手段としやうが、それには全く關係なく、人をして或は快感を覺えしめ、或は苦痛を感ぜしめるもの」である。そしてその謂ふ本來人をして快感を覺えしめる活動とは、例へば勞働にその例を採つて云へば、古來人間の實行し來つた「舞踏化」せられた勞働がこれであり、また勞働歌及び勞働樂を伴ふ勞働も勞働の舞踏化と同じ根源を持つ所の、本來快樂を伴ふ人間の活動である。そしてこの種の「愉快な種類の活動は、別に目的はなくとも、只之に伴うて生ずる快感を追求するために、早くより一つの遊戯として盛に行はれたものであるが、それと違つて、人間の生活に必要な物資を生產するための活動は、不幸にして斯樣の形式の活動となり得ないため、多くは一定の生理的苦痛を伴ふことを免れざりしものである。即ち生產的勞働は、或る目的を達するための手段たる活動だから苦痛を伴ふと云ふ譯ではなくて、苦痛を伴ふ活動だから何等か他の目的を達するため必要已むを得ざる場合に限り、一つの手段として始めて行はるゝに過ぎないのである。して見ると……如何なる活動でも、それ自身を目的とすれば快樂であり、それを手段とすれば苦痛である、と云ふやうに考へるのは、どうしても間違だと謂はなければならぬ。」

しかしこれに反して人間の活動に伴ふ精神的苦痛乃至悦樂は、河上博士の所見に從へば、在內的目的の行爲であるか、或は在外的目的の活動であるかに依つて相違する。即ち「全く同じ活動であつても、それ自體を目的とすれ

ば愉快であり、之を手段とすれば苦痛である、と言ひ得らるゝのである。」其處で博士に從へば、人間の勞働は肉體的にも亦精神的にも苦痛である、といふことになる。しかし肉體的な「苦痛の輕減といふことは、人生にとつて必ずしも大問題ではない。たとひ其れが如何に苦痛であらうとも、もし吾々にとつて意義ある仕事であるならば、吾々は其處に滿足しなければならない筈である。ところが、今日の賃傭勞働者は、其の勞働に際し、之を以て單に賃銀を得るの手段とするより外、致方なき境遇の下に置かれてゐる。だから其の勞働は、全く彼等の生命の犧牲である。」

かくて人生に取つて極めて關係の深いものであると考へられる、勞働の精神的苦痛を出來るだけ輕減するためには、「各人をして其の勞働自體の内に目的を見出さしむることが、勞働に關する根本の問題」である。しからば、吾々は如何にせば、各人をしてその勞働自體の内に目的を見出さしむることが出來るか。これに對して、「簡單に一切の勞働の道德化を說くこと」は、博士の見解に從へば、全く無意味のものである。問題の眞實の解決は、「各人が其れ自身を目的とする仕事に從事するためには、生活のための手段たる仕事に從事する必要の無いといふ條件――各人が生活の保證を得てゐるといふこと――が、先づ備はらなければならない」といふ點にある。そして「各人の生活を保證すると云ふことは、社會の物質的生產力が或る程度以上の發展を爲し遂げた後、始めて實施せられ得ることである。だから結局、如何にすれば勞働の生產力を增加し得るかと云ふことが、その根本の問題になる譯である。」

以上が河上博士の勞働苦痛論の概要である。これに對して吾々はその簡單な評價を附け加へて置かう。

第一に、單に河上博士に限らず、學者は屢〻勞働の苦痛を論じて、生理的苦痛と心理的苦痛とを區別するのであるが、筆者はこの點に就いて今少しく問題を明瞭ならしめることの必要を痛感するものである。元來苦痛なる言葉は不快なる主觀的感情を表明してゐると云つていゝのであつて、從つて苦痛なる狀態は當然意識狀態の感情的側面を示してゐる。この意味で勞働苦痛論は勞働の心理的苦痛に關する研究であり、換言すればそれは當然勞働苦痛に關する心理學的研究でなければならないのである。從つて本來生理的苦痛なる言葉それ自體が時には誤解を生ぜしめる種類のものであつて、出來得べくんばこの言葉の使用が中止された方がいゝと考へられる。しかし假りにこの語の使用が許されるとすれば、吾々はこれに對して次ぎの如き見解を明瞭に認知して置くことが必要であらう。即ち勞働の苦痛、云ふまでもなく勞働の心理的苦痛は種々なる客觀的生活諸條件に依つて條件づけられてゐる。そして――一般的には人間の生活の主觀的方面を條件づける――この客觀的生活諸條件の内に、吾々は人間の活動に基因する生理的諸現象を此處に數へることが出來るのである。換言すれば、勞働に伴ふ生理的諸現象は人間の意識の變化に對する一種の身體的條件である。勞働の苦痛は他の生活諸條件から影響を受けると同樣に、また勞働に伴ふ生理的諸現象から影響を受ける。そこで吾々が生理的苦痛といふ言葉を用るとすれば、それはこの意味に限定されることが適當である。しかし從來不幸にしてこの點は多くの學者に依つて必ずしも明白に認識されてはゐないのである。生理的苦痛をかくの如く限定する吾々の立場から見れば、河上博士のやうに、勞働の苦痛を分析して生理的苦

痛と精神的苦痛といふが如く、態〻二元論的立場を採る必要は全然ないのである。また單に問題はそれ許りではなく、生理的苦痛と心理的苦痛とを對立せしめることは、それだけ問題を不透徹なものとすることを免れない。即ち河上博士の見解に從へば、氏の謂ふ「勞働の舞踏化」は單に生理的な悦樂の問題に過ぎないのであるが、この種の問題は、既に周知の如く、K. Bücher の Arbeit und Rhythmus (6. Aufl., 1924.)の有名な研究以來、心理學的研究の課題として屢〻學者の注意する所となつてゐる。從つて所謂「勞働の舞踏化」の問題の心理學的研究を全然考慮外に置くことに依つて、勞働に伴ふ苦痛と喜悦の主觀的方面が未だ充分論じ盡されてゐないと、評さなければならないであらう。（註八）

更らに學者は屢〻勞働の生理的苦痛と心理的苦痛とを區別することに依つて、多くは後者に對して前者を左程重要なものでないと主張するのであるが、既に前述の如き吾々の見解から觀れば、かくの如き主張が當然差し控へられなければならないものであることは既に明かであらう。蓋し兩者は元來心理學的な問題である勞働苦痛論に對してその重要を比較され得るものでないからである。H. Herkner も嘗つて勞働苦痛の起因を論じて、生理的苦痛に對して心理的苦痛をより重要視してゐる點は、勞働苦痛の科學的見解としては稍〻不徹底であるといふ批評を免れ得ないであらう。（註九）また別にかくの如き主張と關聯して、勞働生理學者である石川知福氏は、生産勞働の生理學的研究の、心理學的研究と共に重要であることを力說して居られるが、（註一〇）吾々も亦氏の主張に傾聽しなければならない。しかし勞働苦痛論を心理學的研究であると見做す吾々の立場からは、勞働に伴ふ生理的諸現象——勞働の生理的疲勞、過勞、疾病、更らに肉體的傷害、死亡——は單に他の生活諸條件と共に勞働苦痛の一種の條件たるに過ぎないのであつて、その謂ふ生理的苦痛が特に重要であるのではない。寧ろ生理的苦痛を過大に重要視することは、勞働苦痛論に於いて吾々をして一方に於いては前述の如く問題の科學的研究を不明瞭なものとし、且つまた他方に於いては問題の單に個人心理學的研究に陷らしめる危險が多分にある。この後者に就いて見れば、幸ひにして河上博士の如き主張は吾々に對して問題の社會心理學的研究の重要を暗示せる點に於いて、その所論の價値が認められねばならないのであらう。

右に紹介した小泉、河上兩博士の勞働苦痛論に於いて見られるやうに、勞働苦痛の起因が勞働時間の過長、或は賃銀制度に影響せられ、また勞働が外在的目的、即ち賃銀の收得の目的のためにのみ行はれるといふ點、或は勞働者がその生計上の切迫から元來彼等自身の欲しない勞働に尙ほ從事せざるを得ないといふ事情、換言すれば職業選擇の自由が事實上制限せられてゐること、そしてまた勞働者は生活の保障を異へられてゐないといふこと、これ等の諸事情が勞働の苦痛を增大する理由であると考へられてゐる。ところが此處に種々に指摘せられてゐる諸事情は總て、勞働並に勞働者の生活に關する社會的諸條件であつて、これ等の社會的諸事情が現在の資本主義的經濟組織に由來するものであることは、此處に說明するまでもなく讀者の理解せられる所であらう。かくて社會科學者がその勞働苦痛論に於いて、勞働苦痛に影響する重大な原因を資本主義の提供する勞働者の生活の社會的諸條件に求めてゐることは、吾々の看過することの出來ない重要な點である。即ちそれは軈て勞働苦痛の社會心理學的研究の重

要を指示するものであつて、特に本來の心理學者の研究に對して、この點こそ心理學者でない社會科學者の吾々の問題に對する貢献であると云はなければならない。

註四、福田德三著　國民經濟講話　第二十三及び四章　參考。
　小泉信三著　社會問題研究（改訂版）三九九頁以後。
　河上肇著　社會組織と社會革命　二八〇頁以後。
　高垣寅次郎　勞働心理の諸問題（高垣、金子共著、產業心理學　二九〇頁以後）。
註五、小泉著　前掲書　四一二―四頁。
註六、拙著　經濟心理學　五一頁。
註七、河上著　前掲書　二八〇頁以後。
註八、尙ほ河上博士の見解に從ふと、先きに引用して置いたやうに、「生產的勞働は……（生理的）苦痛を伴ふ活動だから何等か他の目的を達するため必要已むを得ざる場合に限り、一つの手段として始めて行はるゝに過ぎないのである」と說明せられてゐる。これは近代的工場の非律動化せられた勞動をも說明するものとしては甚だ苦しい說明である。普通には近代的工場勞働のこの方面は生產過程の機械化及び分業化に依つて說明せられるのであるが、河上博士がこの點に觸れてゐないことは全く不可解である。
註九、拙著　經濟心理學　二三六―七頁　參考。
註一〇、石川知福　現代作業制の生理學的批判（勞働科學研究　第二卷　第一號　一―二頁）。

四

勞働苦痛に關する社會科學上の見解に對して、問題の性質上それが從來應用心理學の問題として學者の注意を惹いてゐることは當然である。筆者は此處に勞働苦痛論、從つてまた勞働喜悅論に關する心理學上の見解を二つのものに區別し、一つを能率心理學上の見解とし、他を勞働者心理學上の見解として、その各々の所論の特徵を簡單に摘出して置かうと思ふ。

能率心理學に於ける勞働喜悅論はその最適度原則 Optimalprinzip の主張の裡に保持せられてゐると云つていゝ。そして能率心理學のかくの如き主張は、その創說者である H. Münsterberg 以來、多くの學者に依つて種々に表明せられてゐる。即ちミュンスターベルクの云ふ所に依れば、「經濟的實驗心理學は過度の、勞働に於ける心的不滿足、心的萎縮、壓迫及び心氣沮喪を全然除去する目的を以つて、職業活動を個人の心的特性に適應せしめることを以つて事實恐らく最高の任務とする」と。そしてその後能率心理學に於いては、勞働の苦痛を除去し、勞働の喜悅を增進し、若しくは勞働喜悅の過度の減少を防止し、或はまた勞働者の人格的價値を助長し、生產者としての彼等の福祉を增進することを目的とすると主張せられてゐる。しかし勞働の苦痛を除去し、勞働の喜悅を增進するといふ能率心理學のかくの如き主張が單に一つの空虛なる所見に過ぎないことは、筆者が既に論評した所であつて、（註一一）その所論の詳細を此處に繰返す必要はない。唯だ吾々の批評の基本的な一つの點を此處に繰返すとすれば、それは次ぎの如くである。即ち、勞働の苦痛といひ、或は勞働の喜悅といふは勞働生活の主觀の感情的方面であつて、吾々

の問題としては先づこの主觀的事實を科學的に確證することが必要である。しかもこのことは勞働者の意識生活の社會心理學的研究を除いては全く不可能である。蓋し彼等の意識は特に彼等の生活の社會的諸條件から重大な影響を受けてゐるからである。然るに能率心理學的研究にあつてはこの社會心理學的研究が從來全く看過せられて來てゐる。換言すれば、能率心理學的研究は勞働者の意識生活を科學的に明かにすることを全く知らないものであり、その科學的本質から、能率心理學は單に勞働者の作業能力の主觀的條件に關する個人心理學的、或はまた素質心理學的研究を專ら行ふに過ぎないものである。かくて能率心理學に於けるかくの如き心理學的基礎からは、勞働の苦痛と喜悅の問題の科學的な研究は未だ全く不可能であると云はなければならない。

即ち例へば、能率心理學に於いて勞働苦痛論として特に吾々の注意すべきものは、作業に伴ふ主觀的疲勞、倦怠感、或は單調感に關する研究である。（註一二）それは既に屢、社會科學上問題とせられたことのある所の、近代的工場勞働の機械化及び分業化に依る技術的合理化の勞働者に對する影響の心理學的研究である。この種の心理學的研究が特に同じ問題に對する社會科學者の所論の常識的論調をば科學的認識を以つて補正し得るものであることは、吾々の否定し得ない所であるが、しかし勞働の苦痛に關する心理學的研究としては、この心理學的研究は未だ充分のものではないと云はなければならない。その理由とする所は凡そ次ぎの如くである。作業の單調感、倦怠と主觀的疲勞の心理學的研究は、能率心理學的研究に於いては、單に個人心理學的研究であり、或は時に素質心理學的研究である。――例へば英國に於ける研究に依つて知られてゐるが如く、作業の單調感、或は倦怠感は勞働者各人の知能度の如何に依つて相違する、と云ふが如き科學的確證がこれである。（註一三）――しかし勞働の苦痛は單に作業の單調感、或は倦怠感に盡きてゐるのではなく、更らに作業に對する興味を有せず、創意なく、獨創性を奪はれ、被拘束と被仰壓の意識に滿ち、一般には積極的な勞働意慾に欠ける所がある點に於いて勞働の苦痛の事實が確證されなければならない。しかも勞働苦痛に含まれるこれ等の意識生活の諸事實は、單に個人心理學的研究に依つては到底科學的に理解せられることが不可能であつて、吾々は此處にこれ等の心理的諸事實に關する社會心理學的研究の重要を認めなければならない。しかしかくの如き研究は從來の能率心理學に於いては全く不可能であり、かくて能率心理學は、その心理學的基礎見解の故に、勞働苦痛論を充分科學的基礎づける資格を欠いてゐるものであると云はなければならないであらう。

能率心理學に於ける勞働苦痛論の、右の如き陷欠を滿たすことの出來るものは正に勞働者心理學である。勞働者心理學は現在尙ほ內外の學界を通じて必ずしも多くの學者の注意する所とはなつてゐない。しかし筆者は最近別の機會に勞働者心理學を以つて心理學的研究の一部門を構成する獨立の研究分野として、その科學的確立の努力を公刊したのであつて、從つて此處にその科學的性質に就いて再び縷說する必要を認ない。そして同時に筆者は勞働者心理學の一つの問題として勞働の苦痛と喜悅の問題を指摘し、且つ從來行はれたこの種の研究の二三のものを論評して置いた。（註一四）それ故に勞働の苦痛と喜悅の問題に關する勞働者心理學上の研究を此處に指摘することの必要も亦存しない。唯だ筆者は此處に新たに勞働者心理學の研究に關して讀者に對して次ぎの一事を注意して置くこと

の無益でないことを思ふものである。

元來、勞働喜悦論はヘルクナー（「國民經濟の理論と實踐に於ける勞働喜悦の意義」一九〇五年）以來、心理學的研究に於いて多く注意せられるに至つた問題であり、最近にはH. de Manの勞働喜悦に關する研究（Der Kampf um die Arbeitsfreude, 1927. ――この書は英譯せられ、また佛譯せられて居り、從つて相當に廣く知られてゐると云つていゝ――）に依つて再び吾々の注意を呼ぶに至つてゐる。しかし乍ら勞働者心理學上の勞働の苦痛と喜悦に關する研究は、單に右のヘルクナー及びドウ・マンの研究に限られてゐるのではなく、勞働者心理學の研究中、特に勞働の主觀的態度に關する研究は總てまた勞働の苦痛と喜悦に關する研究であり、更らにまた勞働者心理學上の一切の個々の研究が時に直接或は間接に勞働喜悦論に關聯するものであると云ふことも出來るであらう。蓋し勞働の苦痛と喜悦は先づ勞働體驗の、更らに勞働の主觀的態度の感情的方面である。そして勞働の主觀的態度は勞働者の意識生活の全般に依つて條件づけられてゐるものであるが故に、この意味で勞働の體驗、勞働の主觀的態度、更らに勞働者の意識生活の全般に渡る個々の勞働者心理學上の研究は、實踐的にはまた勞働喜悦論としての意義を持つものであることは明かであらう。かくて筆者が拙著「經濟心理學」に於いて紹介して置いたP. Göhre以來、その多くの研究は一面勞働苦痛に關する科學的研究であると見做され得るものであるが、また實踐的には特に例へばW. Hellpachの「集合的生產方法」、E. Rosenstockの「職場の移植」、更らにW. Eliasbergの動機誘因の教育學の如きは、また勞働喜悦論としての意義を持つものであると考へて宜しからう。かくて勞働苦痛論、從つてまた勞働喜悦論は勞働者心理學の研究に於いて重要な地位を占める。そしてそれは眞に科學的には勞働者心理學の研究に於いてのみ基礎づけられ得るものであると云つていゝ。

しかし以上の所見に對して、筆者は此處に勞働者心理學の研究のために、讀者に對して左の一事を注意して置くことが必要である。勞働の苦痛といひ、また喜悦といふも所詮それは意識の感情的方面に過ぎない。從つてそれは當然快と不快の感情の形式的二方向に歸屬せしめて考へることの出來るものとなる。吾々は勞働者心理學の研究に於いて、勞働の苦痛と喜悦の問題を輕視し得ないものであることは明かであるが、その研究が究極快と不快といふ理論心理學の形式的理解に墮することのないやうに注意しなければならない。（註一五）これに反して寧ろ勞働者心理學の研究は、その應用心理學としての本質から、問題の感情的方面の理解を輕視し得ないことは素よりであるが、更らにより重要なことは勞働者の意識生活の現實的な諸樣相を具體的に理解することが必要である。かくて勞働の苦痛と喜悦に關する研究は勞働體驗、更らに勞働の主觀的態度に關する意識の具象性に於ける研究に依つて支へられなければならない。そしてこのことはヘルパッハとドウ・マンの勞働喜悦に關する見解の內にも兎も角既に示されてゐることであるが、（註一六）更らに吾々はこの點から觀て、勞働喜悦に關する問題は勞働者心理學に於いては勞働の主觀的態度に關する勞働動機論として遙かに重要であると云はなければならない。蓋し云ふまでもなく勞働に伴ふ苦痛と喜悦の感情は、勞働に對する動機の具體的な內容の如何に關聯するものであるからである。

註一一、拙稿　能率心理學と人間技術學（本誌　第二十八卷　第十號）

拙著　經濟心理學　前篇　第四章。

註一二、能率心理學に於けるこれ等の研究として讀者の參考のために、左に數ヶのものを指摘して置くことは必ずしも無益ではなからう。

H. Winkler; Die Monotonie der Arbeit, 1922. (Schr. z. Psychol. d. Berufseign. u. d. Wirtschaftsl, Heft 19.)

H. Wunderlich; Die Einwirkung eintöniger zwangsläufiger Arbeit auf die Persönlichkeitsstruktur, 1925. (Dieselben Schr., Heft 31.)

E. Bruker; Psychotechnische Untersuchungen zur Bandarbeit, 1931. (Dieselben Schr., Heft 39.)

I. Burnett; An Experimental Investigation into Repetitive Work, 1925. (Rep. of I. F. R. B. No. 30.)

S. Wyatt and J. A. Fraser; The Effects of Monotony in Work, 1929. (Rep. of I. F. R. B. No. 56.)

増田幸一　作業單調感に關する研究（心理學論文集IV　二〇九―二一三頁）。

註一三、註一二に示して置いた「齒業疲勞調査局」(I. F. R. B.)の報告を參照せよ。

註一四、拙著　經濟心理學

註一五、A. Levenstin がその勞働者心理學的研究(Die Arbeiterfrage, 1912.)の結論に於いて、筆者が此處に指摘するが如き缺點を示してゐる。（拙著　經濟心理學　二五一頁　參考）

註一六、拙著　經濟心理學　三五九頁以後　參照。

五

河上博士はその勞働苦痛論に於いて W. Smart の見解を引用して、勞働者の意識に對する單なる「道德的改造」の主張が架空の所論であることを說いてゐるが、（註一七）吾々も亦勞働者心理學の立場からこの河上博士の所說を是認しなければならない。これと關聯して筆者は此處に單なる觀念論的勞働喜悦論の批判を附加して置かうと思ふ。

ゲェーレはその勞働者心理學的研究の結論に於いて、「勞働者問題は單なる胃の腑と賃銀の問題である許りではなく、先づ敎育と宗敎の問題である」となし、從つて實踐的には、不信仰な社會民主黨をキリスト敎化し、その反キリスト敎的、唯物論的世界觀を破壞せんとする新敎的敎育こそ勞働者問題の解決の最も重要な點であると見做したはれてゐるけれども、それは偏頗な唯物論的見解に過ぎないものであつて、これとは反對に「社會問題は特に精神的、倫理的問題である」と主張し、彼も亦勞働者に對する觀念論的敎育を重要視してゐる。（註一九）凡そかくの如き見解が從來最も廣く行はれてゐたと見做していゝのであるが、また特に最近ではナチスの影響の下にあるドイツの能率心理學が、勞働者の倫理的敎育を重要視するに至つて居り、ディンタの敎育目的が同じく勞働者の意識生活の倫理的改造にあることは、筆者の既に別の機會に指摘した所である。そしてこれと同樣の事柄は單にドイツに限らず、資本主義諸國に於ける資本家的勞働者敎育に就いて、吾々の等しく認めることの出來る所である。

勞働者に對する觀念論的敎育が勞働喜悦の增進に關聯して持つ意義は、彼等をして彼等の勞働に於いて社會的、倫理的意義を自覺せしめることが可能であると考へられる點に存してゐる。即ち勞働者をして彼等の勞働の目的が社會的奉仕にあり、全體としての社會の繁榮にあると考へしめることが、彼等に對する觀念的敎育の目標とする所

である。しかし吾々はこれに對して凡そ次ぎの如き勞働者心理學的立場からの科學的批判を加へることが出來るであらう。即ち、勞働者の現實的意識生活は既に社會の現實的諸關係に依つて重大な影響を蒙つてゐる。然るに意識生活に對するこの社會的、現實的生活諸條件の影響を全く考慮外に置いて、專ら單に觀念的刺戟を考へることのみに依つて勞働者の意識生活を完全に倫理化し得ると考へることが、果して如何なる程度まで妥當であるか、吾々に取つてはそれは重要な疑問である。勿論教育的環境は吾々の生活の重要な一種の生活條件であつて、それの吾々の意識生活に對する影響を全く否定することは出來ない。しかしそれは他の生活諸條件と共に吾々の意識生活の刺戟としての意義を持つに過ぎない。從つて勞働者に對する單なる觀念論的教育は少くとも彼等の意識生活に對する他の一切の生活諸條件の影響を無視し、單に教育的環境の影響を過大視してゐるものである、といふ批評を到底免れることの出來ないものである。

勞働喜悦の增進問題としても亦時に重要なりと考へられる勞働者に對する資本家的、觀念論的教育は、經營のまた一般に資本主義的な勞働者政策の重要な部分をなしてゐるのであるが、その資本家的勞働者政策としての本質は究極勞働者の意識生活の倫理化に依つて彼等に課せられた仕事に忠實な勞働者を養成しやうとする點にあり、從つてそれはまた結局勞働能率の增進を企圖する所の資本家的方策に過ぎないものであると云はなければならない。そしてかくの如き資本家的方策は、雇主と勞働者との間の人格的關係が益〻稀薄となり、また技術的、組織的には常に合理化が企圖せられてゐる大經營に於いて、一層その必要を痛感せられるに至ることは明かである。

かくて一般に勞働者の意識を倫理化そうとする單なる觀念論的教育は、勞働の喜悦を增進し、從つてまた彼等の生活上の福祉を助長し、そして勞働者問題の解決にまで資しやうとするものであるけれども、それは彼等の意識に對する他の社會的諸條件の影響を全く考慮外に置いてゐる點に於いて科學的な批判を免れない。しかも資本主義の下に於ける勞働者の社會的生活諸條件の彼等の意識に對する影響が、多くは彼等に對する觀念論的、倫理的教育の企圖する影響を相殺するが如きものであり、更らにそれを全く無効のものたらしめるが如きものたるに於いては、——即ち勞働者が常に失業の危險にさうされて居り、全く生活の保證を得てゐないといふ事情がその最も著明な事實である——その教育的方策の特質的な効果は全然疑はしいものであると云はなければならない。更らにその教育の本質が結局勞働者の能率の增進にあると見做されるに於いては、勞働喜悦の增進のために學者がそれに對して重要な意義を認めることは、吾々の到底讃同し得ない所であると云つていゝ。

註一七、河上著　前揭書　二八八—二九五頁。

註一八、拙著　經濟心理學　二二七頁　參照。

註一九、E. Hormeffer; Der Weg zur Arbeitsfreude, S. 8-10.
F. Ludwig, hersg. von; Der Mensch im Fabrikbetrieb, 1930, S. 6.

六

勞働苦痛論、反對にまた勞働喜悦論に關する以上の至極簡單な檢討から、筆者は次ぎの如き結論を此處に附加す

ることが出來る。

第一に、勞働苦痛論乃至勞働喜悦論は舊くから社會科學者の留意し來つた所であるが、問題の性質上それは心理學的に基礎づけられねばならないものである。しかも現在に至るまで尙ほ社會科學者自身はその問題の眞に科學的な認識を援用することなく、單に常識的な心理學的理解の上に立ち、また時には獨斷論的な心理學的見解に基づいて徒らに勞働苦痛の事實の一般的、普遍的確認を說いてゐる。しかしこの問題に對する從來の社會科學者の貢獻し得た所は、勞働の苦痛、或は勞働の喜悦が勞働者の生活の社會的諸條件に依存することを認めて來た點であつて、それは問題の心理學的研究に對して正に社會心理學的、生活心理學的研究の必要を暗示してゐたことである。

更らに勞働の苦痛といふ事實を科學的に確證し、實踐的には勞働の喜悦を增進せんがための心理學的研究は、從來の能率心理學的研究としては不充分であり、且つ不可能である。蓋し能率心理學の心理學的基礎見解は個人心理學乃至素質心理學（或は差異心理學）であつて、社會心理學、或は生活心理學ではないからである。これに對して生活心理學的基礎を持つ勞働者心理學こそ勞働苦痛論乃至勞働喜悦論を眞に科學的に基礎づけ得るものである。加之、勞働者心理學上の諸研究は總て勞働の苦痛と喜悦に關する研究に關聯すると見做されるものである。

最後に、勞働の苦痛を除去し、或は輕減し、積極的に勞働の喜悦を增進することは、勞働者政策の問題として、更らに社會問題に對して重要な一つの問題を構成すると見做されてゐる。ヘルクナーは既に勞働の苦痛を除去し、勞働の喜悦を增進することが、尙ほ未だ社會政策の基礎原則として公認せられる所とはなつてゐないことを認めてはゐたが、彼は「吾々の全經濟生活が先づ勞働喜悦の視角から觀察せられること」の重要を認めてゐたのであり、從つて彼に於いては勞働喜悦の增進のための心理學的研究は、經濟政策乃至社會政策の基礎として重要視せられてゐたと云つていゝ。（註二〇）かくて經濟政策乃至勞働者政策と勞働者心理學との關係が確認せられることが必要となる。この點に於いて吾々は社會科學的政策論と勞働者心理學の技術論との關聯、從つてまた社會科學者と勞働者心理學の研究者との提携の必要を特に力說しなければならない。

尙ほ本論に於ける筆者の序述は多くの點に於いて甚だ簡略に過ぎた觀があるが、それ等の點は總て最近公刊した拙著「經濟心理學」に於いて詳細に論じて置いた處であつて、此處に讀者に對して拙著に對する參讀を期待する所以である。がまた同時に本論は拙著に對する一つの補論としての意義を以つて書かれたものであることを附言して置かう。

註二〇、拙著　經濟心理學　二四〇頁　參照。

——昭和十年四月十六日稿了——